法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-27

わが"逸脱体質"

小笠原, 賢二 / OGASAWARA, Kenji

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要

(巻 / Volume)
49

(開始ページ / Start Page)
112

(終了ページ / End Page)
112

(発行年 / Year)
1994-03-15

(URL)
https://doi.org/10.15002/00019740

わが、逸脱体質が

小笠原 賢二

私が法大に在籍したのは、修士課程を含め 「年代後半から七○年にかけての全国的な学 しば道草を食ったり、廻り道をしたりしすぎ はない。今から思うにどうやらそれは、しば はない。今から思うにどうやらそれは、しば の年代後半から七○年にかけての全国的な学 園紛争という時代状況の影響も、もちろんあ 園紛争という時代状況の影響も、もちろんあ

方が大事だった。
方が大事だった。全共闘に共感を抱いてはいたが、生活のられて、学校にいる時間はさほど多くはなかっられて、学校にいる時間はさほど、一介の苦学というのではない。事態は逆で、一介の苦学というのではない。事態は逆で、一介の苦学というのではない。

運動を横目で見ながら、小田切秀雄先生の である。 運動を横目で見ながら、小田切秀雄先生の をいと考えていたのである。ゼミでの収穫を ないと考えていたのである。ゼミでの収穫を ないと考えていたのである。ゼミでの収穫を をんな中からいささかの問題意識を持ち始 そんな中からいささかの問題意識を持ち始 たが、なにしろそれが、「七〇年安保」の年 たが、なにしろそれが、「七〇年安保」の年 たが、なにしろそれが、「七〇年安保」の年

闘争の拠点の一つになっていた法政の学内 にない、六八年頃からしじゅう、スピーカーに よる演説が飛びかい、党派どうしの衝突がく よる演説が飛びかい、党派どうしの衝突がく た。状況に対して、各人に明確な姿勢を求め た。状況に対して、各人に明確な姿勢を求め るような雰囲気が強かった。そのため休講も多かっ るような雰囲気が強かった。からいがあった。 ためらいがあった。

ほとんど同時に休学届けを出したのは、そんをすることにした。大学院への入学手続きといというので私は、一年間だけ実家の手伝いで入院したのはその頃だった。働き手がいな北海道の実家で農業を継いでいる兄が病気

な事情からである。

しかし農業は甘くない。 五日は、馬を使って田に肥料を運んでいた。 五日は、馬を使って田に肥料を運んでいた。 五日は、馬を使って田に肥料を運んでいた。 昼休みのテレビでそれを知ってやりきれない 昼休みのテレビでそれを知ってやりきれない 気分になり、翌朝まで酒を飲み続けた。 には高橋和巳も病死したが、その年の五月 には高橋和巳も病死した。 関心を持ち続けて

至っている。この先、どうなるのか。 た書評新聞の編集の方に大幅に時間をとられ、た書評新聞の編集の方に大幅に時間をとられ、 とで生活は保障されたが、学校の方はおろことで生活は保障されたが、学校の方はおろことで生活は保障されたが、学校の方はおろことで生活は保障されたが、学校の方はおろことで生活は保障されたが、学校の方はおろいた。

(一九七五年修士課程修了・文学部講師) 。逸脱』も楽しいけれど、ほどほどに。

えさせられたが、それを忘れるように、アルきた二人の作家の相次ぐ死には、いろいろ考

バイトと勉強を再開した。